

# グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門活動報告

## 【1】比較日本学教育研究部門運営委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、浅田徹（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、神田由築（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、田中琢三（比較社会文化学）、谷口幸代（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、松岡智之（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、宮尾正樹（比較社会文化学）、本林響子（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成29年（2017）4月12日
- 第2回 平成29年（2017）5月24日
- 第3回 平成29年（2017）6月21日
- 第4回 平成29年（2017）7月26日
- 第5回 平成29年（2017）9月6日
- 第6回 平成29年（2017）10月24日
- 第7回 平成29年（2017）11月29日
- 第8回 平成29年（2017）12月20日
- 第9回 平成30年（2018）1月31日

## 【2】比較日本学教育研究部門研究委員会

古瀬奈津子（比較社会文化学）、新井由紀夫（比較社会文化学）、石井久美子（比較社会文化学）、大藪海（比較社会文化学）、香西みどり（ライフサイエンス）、田中琢三（比較社会文化学）、竹村明日香（比較社会文化学）、中野裕考（比較社会文化学）、難波知子（比較社会文化学）、宮内貴久（比較社会文化学）、湯川文彦（比較社会文化学）

- 第1回 平成29年（2017）4月12日
- 第2回 平成29年（2017）5月24日
- 第3回 平成29年（2017）6月21日

- 第4回 平成29年（2017）7月26日
- 第5回 平成29年（2017）9月6日
- 第6回 平成29年（2017）10月24日
- 第7回 平成29年（2017）11月29日
- 第8回 平成29年（2017）12月20日
- 第9回 平成30年（2018）1月31日

## 【3】第19回国際日本学シンポジウム

テーマ「文化史上の源氏物語」

主催：グローバルリーダーシップ研究所  
比較日本学教育研究部門

日程：平成29年（2017）7月8日（土）～9日（日）

場所：お茶の水女子大学 本館306室

▽7月8日（土）

セッションⅠ「制度・規範の変遷と『源氏物語』

— 明文化された制度と慣習としての制度 —

【挨拶】三浦徹（お茶の水女子大学理事）

【趣旨説明・司会】松岡智之（お茶の水女子大学）

【基調講演】胡潔（名古屋大学）

「『源氏物語』と平安時代の婿取婚」

【パネルディスカッション】

重田香澄（山口市歴史民俗資料館）

「『源氏物語』の時代の儀礼と知識

— 「例」と「儀」、「説」—

藤村安芸子（駿河台大学）

「日本仏教思想史上の『源氏物語』」

高野奈未（静岡大学）

「注釈史上の『源氏物語』」

丸山裕美子（愛知県立大学）

「『源氏物語』にみる女房・女官の制度」

▽7月9日（日）

セッションⅡ「表象文化史の中の『源氏物語』」

【趣旨説明・司会】松岡智之（お茶の水女子大学）

【基調講演】張龍妹

（北京外国語大学北京日本学研究中心）

「平安物語文学における「孝」の受容

—『源氏物語』を中心に—

【パネルディスカッション】

赤澤真理（岩手県立大学盛岡短期大学部）

「建築史の中の『源氏物語』

—同時代の住宅像と考証学のあいだ—

植田恭代（跡見学園女子大学）

「『源氏物語』にみる舞楽・催馬楽」

石井倫子（日本女子大学）

「能の『源氏物語』

—「源氏能」は何を描くのか—

河添房江（東京学芸大学）

「源氏絵に描かれた衣裳

—院政期から近世まで—

#### 【4】シンポジウム実行委員会

古瀬奈津子（部門長）

松岡智之（司会）

#### 【5】第12回国際日本学コンソーシアム

テーマ「壁をこえる」

主催：グローバルリーダーシップ研究所

比較日本学教育研究部門

日程：平成29年（2017）12月11日（月）～12日（火）

場所：文教育学部1号館1階第一会議室、

本館1階103室（生活科学部会議室）

参加校：北京外国語大学北京日本学研究中心（中国）、ロンドン大学東洋・アフリカ研究学院（イギリス）、フランス国立東洋言語文化大学（フランス）、パリ・ディドロ大学（フランス）、同徳女子大学校（韓国）、高麗大学校（韓国）、国立台湾大学（台湾）、ハワイ大学（アメリカ）、カレル大学（チェコ）、名古屋大学（日本）、一橋大学（日本）、お茶の水女子大学（日本）

▽12月11日（月）

○開会式

【挨拶】古瀬奈津子（部門長）

○日本文学部会

【挨拶】佐々木泰子（お茶の水女子大学副学長）

【司会】羅小如（お茶の水女子大学）

包祐寧（台湾大学）

「『雨月物語』『夢窓の鯉魚』における

鯉魚の放生について」

胡穎芝（お茶の水女子大学）

「漱石文学における「縹緲」

—『虞美人草』の「縹緲のあなた」について」

林京華（台湾大学）

「『門』小論—宗助に見る他者性の揺れ」

ユルコヴィッチ・トマーシュ（カレル大学）

「過去という壁を越えた村上春樹の小説の

主人公」

杉江扶美子（パリ・ディドロ大学）

「向こうからの声たちと小説をこえて

—いとうせいこう『想像ラジオ』と木村友祐

『イサの氾濫』において」

金学淳（高麗大学校民族文化研究院）

「日韓の貸本文化—読者と広告を中心に—」

ティララ・マルティン（カレル大学）

「落窪の君が壁を越えた時」

朱秋而（台湾大学）

「江戸後期の関東詩壇—市河寛斎を中心に—」

范淑文（台湾大学）

「真杉静枝文学に語られる「壁」

——「鳥秋」、「母の傑作」の主人公たち」

▽12月12日（火）

○日本文化部会

【司会（午前部）】馬場貴和子

（お茶の水女子大学）

董航（お茶の水女子大学）

「浅井了意の唱導に対する再考察」

清水真裕 (お茶の水女子大学)

「貝原益軒における「楽」の領域」

平木しおり (ロンドン大学SOAS)

「徳川綱吉の御成と美術」

馬場幸栄 (一橋大学)

「知られざる科学史のヒロイン」

国際緯度観測事業を支えた岩手の少女たち」

【司会 (午後の部)】 古内絵里子

(お茶の水女子大学)

潘蕾 (北京外国語大学北京日本学研究センター)

「古代日本の大兄に関する一考察」

劉玥揚

(北京外国語大学北京日本学研究センター)

「明治天皇のイメージに関する一考察」

ドナルドキーン『明治天皇』を中心に」

小沼イザベル (フランス国立東洋言語文化大学)

「優生思想の法と歴史

—学際的アプローチからみえてくるもの」

周維宏

(北京外国語大学北京日本学研究センター)

「文化近代化の含意および測定について」

○日本語学・日本語教育学部会

日本語学部会

【司会】 田嶋明日香 (お茶の水女子大学)

宇野和 (お茶の水女子大学)

「Twitterにみるオノマトベに後接する

接尾辞ミの機能」

李恩兆 (高麗大学校)

「日韓外国語の定着形態に関する比較研究」

永澤済 (名古屋大学)

「壁をこえた法律家たち—近代口語化の実践—」

金囁泳 (同徳女子大学校)

「日本と韓国の若者言葉」

日本語教育学部会 15:00~

【司会】 洪春子 (お茶の水女子大学)

伊藤聖子 (お茶の水女子大学)

「助詞「は」の習得

—主題化の発達過程を探る—」

陳雲川 (ハワイ大学)

「中国語母語話者による

日本語の関係節の習得について」

福田伸一郎 (ハワイ大学)

「日本語話者の直感の数量化から何が学べる

か：個々の直感の壁を超えて」

○全体会・閉会式

【司会・挨拶】 神田由築 (お茶の水女子大学)

## 【6】 コンソーシアム実行委員会

古瀬奈津子

(部門長、日本文化部会コーディネーター)

谷口幸代 (日本文学部会コーディネーター)

松岡智之 (日本文学部会コーディネーター)

神田由築 (日本文化部会コーディネーター)

中野裕考 (日本文化部会コーディネーター)

宮内貴久 (日本文化部会コーディネーター)

石井久美子

(日本語学・日本語教育学コーディネーター)

竹村明日香

(日本語学・日本語教育学コーディネーター)

本林響子

(日本語学・日本語教育学コーディネーター)

# 研究プロジェクト活動報告

## 1. 文理融合の食文化研究

- ①主旨：現在、世界中で「食」に対する関心が高まりつつあり、日本においても様々な角度から「食」の諸問題が議論されている。これらの議論の背景には、西洋科学文明の行き詰まりがある。「食」の現代的課題を解決するためには、世界的な視点で日本の「食」の問題を考えていく必要がある。また、数量化に象徴される栄養科学の視点からだけではなく、人文学からの視点を含めた複合的な文理融合の視点によって、「食」の問題に対処することが肝要である。本研究では、本学で研究・教育が蓄積されてきた国際日本学分野と食物栄養学分野の研究者・院生が合同で、これらの課題解決のために共同研究を行う。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：  
香西みどり（本学教員）、村田容常（本学教員）、  
神田由築（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、  
新井由紀夫（本学教員）、伊藤有紀（本学研究員）
- ④客員研究員：  
マクシム・シュワルツ（パスツール研究所）、  
シャルロット・フォン・ヴェアシュア（フランス国立高等研究院）
- ⑤研究協力員：  
野田有紀子（本学修了生）、矢越葉子（本学修了生）
- ⑥活動経過  
(1) 授業等  
文理融合リベラルアーツ「色・音・香」9「おいしさと色・音・香」の開講について打合せを行った。また、リベラルアーツ演習において食に関するテーマを設定できるか可能性を探った。

## 2. 東アジアにおける古代末期の王権と儀式の比較史的研究

- ①主旨：東アジアにおいては古代末期にあたる時期に、日本では院政が成立して院に権力が集中し、中国では唐宋変革期の皇帝権力が専制化するように、王権が権力集中することが知られている。本プロジェクトでは、なぜこの時期に王権の権力集中が行われるのか、権力集中化は儀式などの支配構造にどのような影響を与えたのかを比較史的視点から解明することを目的とする。
- ②プロジェクト担当者：古瀬奈津子（本学教員）
- ③学内研究員：  
古内絵里子（本学RF）、東海林亜矢子（本学研究員）
- ④学内協力員：  
永井瑞枝（本学院生）、谷田淑子（本学院生）、  
保田那々子（本学院生）、牟佩（本学院生）
- ⑤客員研究員：  
金子修一（國學院大学）、石見清裕（早稲田大学）、  
桑野栄治（久留米大学）、大隅清陽（山梨大学）、  
藤森健太郎（群馬大学）、稲田奈津子（東京大学史料編纂所）、  
丁珍娥（韓国・祥明大学）
- ⑥研究協力員：  
重田香澄（山口大学非常勤講師）、野田有紀子（本学修了生）、  
矢越葉子（本学修了生）
- ⑦活動経過  
(1) 著書・雑誌論文等  
古内絵里子『古代都城の形態と支配構造』同成社、210ページ、2017年7月  
東海林亜矢子『平安時代の后と王権』吉川弘文館、276ページ、2018年1月  
古瀬奈津子「藤原道長と公卿」『むらさき』54輯、85-89ページ、2017年12月

重田香澄「『源氏物語』の時代の儀礼と知識—「例」と「儀」、「説」—」『比較日本学教育研究部門年報』第14巻、2018年3月

(2) 学会発表等

重田香澄「『源氏物語』の時代の儀礼と知識—「例」と「儀」、「説」—」第19回国際日本学シンポジウム「文化史上の源氏物語」、2017年7月8日、於お茶の水女子大学

古瀬奈津子「敦煌における吉凶書儀の展開と日本の往来物について」新疆出土文献與絲綢之路国際学術研討会、2017年11月7日、於旅順博物館（中国）

矢越葉子「唐の案巻と日本の継文」同上

谷田淑子「日本・新羅の対外関係と東部ユーラシア～天平四年・六年を中心として～」第115回史学会大会、2017年11月12日、於東京大学（本郷）

(3) その他

科学研究費助成事業応募に向けて打合せを行った。

### 3. 日仏文化交流の研究

#### Cultural exchange between Japan and France

①主旨：明治期から現在に至るまで、日本とフランスの文化が相互にどのような影響を及ぼし合ってきたのかを検討する。

②プロジェクト担当者：田中琢三（本学教員）

③学内協力員：

八木橋久実子（本学院生）、梶谷彩子（本学院生）

④活動経過

〈発表論文〉

1. 田中琢三「政治的事件としてのゾラのパンテオン葬」、『お茶の水女子大学 人文科学研究』、第14巻、お茶の水女子大学、2018年3月。

〈口頭発表〉

1. 八木橋久実子「ロラン・バルトのカッサン

ドラ」、日本フランス語フランス文学会2017年度春季大会、東京大学駒場キャンパス、2017年6月3日。

2. 佐藤弘夫・田中琢三・野口哲也「異界との往来：幽霊・妖怪・精霊のすむところ」、都留国際文学祭Tsuru International Literary Festival 2017、都留文科大学、2017年8月9日。

3. 田中琢三「ヴィクトル・ユゴーのパンテオン葬」、ワークショップ「パンテオンと作家たち」、日本フランス語フランス文学会2017年度秋季大会、名古屋大学東山キャンパス、2017年10月29日。

#### 4. 英語・日本語における食べ物に対する感覚評価と文化的アイデンティティ Sensory Evaluation of Food and Cultural Identity in English and Japanese

①主旨：日本語と英語における、食べ物に関する味覚や嗅覚などについての感覚評価の表現について分析する。それらが日英の文化的なアイデンティティ形成とどのように結びつくか等について、インタビューや会話等を材料として研究する。

We propose to investigate how people describe their taste preferences and experience food in English and Japanese. We will use interviews, surveys and sensory evaluative conversations to investigate how people do use verbal/nonverbal behavior to assess food, influence one another's preferences, and construct identities.

②プロジェクト担当者：香西みどり（本学教員）

③学内研究員：石井久美子（本学教員）

④学内協力員：福留奈美（本学研究員）

⑤研究協力員：

ポリリー・ザトラウスキー（米・ミネソタ大学）、星野祐子（十文字学園女子大学）

⑥活動経過：

本年度は、2016年度に行った①乳製品の試食

会の談話分析データ、および②乳製品の官能評価のデータを分析し、その成果を発表した。

なお、②の研究では、女子大学生対象に乳製品3種類（牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム）の官能評価を行い、そのデータを分析している。調査協力者は、ザトラウスキー氏が談話分析の試食会で用いた試料と同じものを一人で試食・試飲し、五感でとらえられる対象物の官能特性をことばで記述し、嗜好性（好き・嫌い）についても回答している。本年度は、研究成果の一部として、主にミルクに関する報告を行った。今後、他の試料についての分析も進め、発表の機会を探る予定である。

本年度の本プロジェクトに関連して発表した研究成果は下記の通りである。

(1) 共著書

ザトラウスキー・ポリー（2017）「既知と未知の食べ物を巡る曼荼羅」庵功雄・石黒圭・丸山岳彦『時間の流れと文章の組み立て—林言語学の再解釈』ひつじ書房pp. 239-268.

Szatrowski, Polly. (印刷中) Tracking references to unfamiliar food in Japanese Taster Lunches: Negotiating agreement while adapting language to food. *The JAPANESE language from an empirical perspective: Corpus-based studies and studies on discourse*, ed. by Andrej Bekeš & Irena Srdanović, 42-60. Ljubljana, Slovenia: University Press, Faculty of Arts = Znanstvena založba Filozofske fakultete.

(2) 学会発表

Szatrowski, Polly and Fumio Watanabe. 2017. What can students and people in the community in the US learn from Japanese tea ceremony? Presented at the panel entitled “Of clouds and water: The beauty of experiential learning” at the AATJ (American Association of Teachers of Japanese) 2017 Spring Conference. March 16. Toronto, CANADA.

Szatrowski, Polly. 2017. Play participation and sen-

sory experiences of food at Japanese taster lunches. Presented at the conference Intersubjectivity in Action, May 11-13, University of Helsinki, FINLAND. Fukutome, Nami., Szatrowski, Polly. 2017. Comparative study of Japanese expressions used for individual versus group sensory evaluation of dairy foods and drinks. Presented at the panel entitled “English and Japanese assessment/ evaluation of dairy and snack foods in individual sensory evaluation, focus groups, and spontaneous conversation” at the 15th International Pragmatics Conference. July 18. Belfast, NORTHERN IRELAND.

Szatrowski, Polly. 2017. Japanese food descriptions and evaluations at Dairy Taster Brunches. Presented at the panel entitled “English and Japanese assessment/ evaluation of dairy and snack foods in individual sensory evaluation, focus groups, and spontaneous conversation” at the 15th International Pragmatics Conference. July 18. Belfast, NORTHERN IRELAND.

(3) 講演

ザトラウスキー、ポリー（2017）「感覚的体験を表すオノマトペについて—乳製品の試食会の場合」早稲田大学、11月10日。

ザトラウスキー、ポリー（2017）「乳製品の試食会におけるオノマトペ」南山大学、11月11日。

ザトラウスキー、ポリー（2017）「相互作用によるオノマトペの使用—乳製品の試食会を例にして」お茶の水女子大学、12月25日。

## 5. 大正期の外来語受容—100年前の“グローバリゼーション”—

①主旨：大正から100年を経たのを機に、従来研究があまりなされてこなかった大正期外来語の実態と、その近代語史における位置づけを、各種資料や語彙調査からあきらかにすることをめ

ます。

②プロジェクト担当者：石井久美子（本学教員）

③学内協力員：

三浦憂紀（本学AF）、田嶋明日香（本学院生）、  
河野礼実（本学院生）、野口芙美（本学院生）、  
小野舞子（本学院生）、宇野和（本学院生）

④研究協力員：

高崎みどり（本学名誉教授）、染谷裕子（田園  
調布学園大学）、中里理子（佐賀大学）、立川和  
美（流通経済大学）、星野祐子（十文字学園女  
子大学）

⑤活動経過：

本年度は、2014年度から行ってきた、大正期  
の『中央公論』と『婦人公論』の外来語調査の  
成果を公開するため、各自の執筆した原稿をと  
りまとめた。書籍化にあたって、対象とした資  
料の一覧を作成し、各資料の外来語の有無を追  
加調査した。2018年度中に、富山房インターナ  
ショナルより出版予定である。

その他、本年度の本プロジェクトに関連して  
発表した研究成果は下記の通りである。

(1) 書籍

石井久美子（2017）『大正期の言論誌に見る外  
来語の研究』三弥井書店、A5判、400ページ

(2) 論文

星野祐子（2017）『月刊食道楽』における外  
来語の機能 ―明治末期と昭和初期に刊行され  
たグルメ雑誌を資料にして―『十文字学園女  
子大学紀要』第47集、pp.91-104

石井久美子（2017）『『九ポイント假名附活字  
見本帳』に見るルビ付き活字―外来語定着の一  
側面―』『お茶の水女子大学人文科学研究』第  
13巻、pp.69-83

中里理子（2017）「大正期の『中央公論』『婦  
人公論』に見られる普通名詞の外来語』『佐賀  
大学教育学部研究論文集』2（1）、pp.141-168

石井久美子（2017）「女性と結びついた外来語  
に見えるマイナス評価―大正期の『婦人公論』

を材料に―』お茶の水女子大学国語国文学会  
『国文』第127号、pp.56-70

## 6. 現代における民俗学の再構築

①主旨：現代における民俗学の再構築を目指し  
て、以下の三つの課題の実現を目指す。①先鋭  
化：民俗学の先人たちを乗り越え、新たな理論  
の構築を目指す。②実質化：民俗学において自  
明視されていた知的前提や技法を明晰に表現  
し、他分野との対話と開かれた議論の土台を作  
り出す。③国際化：国際的な広がりを前提とし  
た日本民俗の把握を推し進めるとともに、世界  
各国の民俗学との交流を確立する。

②プロジェクト担当者：宮内貴久（本学教員）

③客員研究員：

飯倉義之（國學院大學）、及川祥平（成城大学）、  
川田牧人（成城大学）、川森博司（神戸女子大  
学）、島村恭則（関西学院大学）、菅豊（東京大  
学）、塚原伸治（茨城大学）、徳丸亞木（筑波大  
学）、野口憲一（日本大学）、俵木悟（成城大学）、  
古家信平（筑波大学）、渡部圭一（筑波大学）

④研究協力員

⑤活動経過：

◆日時：2017年5月20日（土）

「民俗学」×「はたらく」―職業生活と〈民俗学〉  
的知―

場所：東京大学東洋文化研究所

発表者：岩館岳（紫波町教育委員会事務局生涯  
学習課主任兼社会教育主事）、樽田俊祐（株式  
会社浜銀総合研究所地域戦略研究部研究員）、  
野口憲一（日本大学文理学部非常勤講師・（株）  
野口農園取締役（採用・企画プロデュース担当）

◆日時：2017年9月30日（土）

会場：埼玉県立歴史と民俗の博物館

戦う身体民俗学

発表者：中里亮平（長野大学非常勤講師）、池  
本淳一（松山大学准教授）、清水亮（東京大学

大学院)

コメンテーター：戸邊優美（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

司会・コーディネーター：鈴木洋平（埼玉県立歴史と民俗の博物館）

◆日時：2017年12月17日（日）

会場：早稲田大学

「競い」の光景—祭礼・芸能・スポーツ研究を展望する

発表者：伊藤純（早稲田大学人間総合研究センター）、中里亮平（長野大学非常勤講師）、田邊元（富山大学芸術文化学部）

コメント：阿南透（江戸川大学社会学部）

## 7. 哲学、倫理、宗教、科学思想に関する比較思想的研究

### A comparative study of philosophy, ethics, religion and scientific thought

①主旨：日本人研究者と各国の研究者・留学生が協力して、日本、西洋、東洋の伝統思想や現代哲学の比較研究を行うことによって、日本思想、西洋思想、東洋思想の特殊性、独自性を浮き彫りにすると同時に、共通点についても理解をふかめる。さらに、人間の存在構造、認識構造の普遍性についても明らかにする。日本思想史、西洋思想史、東洋思想史の研究者の意見交換によって幅広い視点から問題を考察する。

②プロジェクト担当者：

高島元洋（本学名誉教授）、中野裕考（本学教員）、宮下聡子（本学教員）

③学内研究員：

三浦謙（本学教員）、小濱聖子（本学RF）、鈴木朋子（本学研究員）、荒木夏乃（本学非常勤講師）、遠藤千晶（本学非常勤講師）、大久保紀子（本学非常勤講師）

④学内協力員：

清水真裕（本学院生）、陳先蘭（本学院生）、大持ほのか（本学院生）、飯田明日美（本学院生）、

阿部雅（本学院生）

⑤客員研究員：

エマニュエル・カタン（フランス・ブレーズ・パスカル大学）、アラン・プティ（フランス・ブレーズ・パスカル大学教員）、ロレンテュ・アンドレイ（ブレーズ・パスカル大学院生）、徐翔生（台湾・政治大学）、吉田杉子（国学院大学）、森上優子（文部科学省）、木元麻里（文部科学省）、石崎恵子（JACSA）、斎藤真希（静岡大学）、小林加代子（中京大学）、清水恵美子（茨城大学）

⑥研究協力員：

ローレン・ジャフロ（フランス・パリ第一大学）、イブ・シュワルツ（フランス・エクス・マルセ大学）、清水恵美子（茨城大学）

⑦活動経過：

本年度は、例年のように日本学コンソーシアムに日本思想研究の立場から参加し（清水真裕）、同時に本プロジェクトで自主的に以前から行っている研究を継続することができた。

◆近代比較思想研究会：本プロジェクトの一環として研究会を定期的に開催した。近代日本の思想家を、世紀転換期の日本と西洋における思想の動向の中に位置づけ、その思想の特色や意義を明らかにすることを目的とする。月一回程度の研究会を開催し、国内外の参考資料に目を通し議論を交わすとともに、学外における研究会報告、論文投稿などを行っている。メンバーは客員研究員の森上優子氏、清水恵美子氏、学内研究員の鈴木朋子氏である。今年度は、新渡戸稲造、増田義一、岡倉覚三（天心）、岡倉由三郎、清沢満之、吉谷覚寿、佐々木月樵を取り上げ、その思想や信仰の相違点と共通点を浮き彫りにするため、テキスト分析や国内外の思潮との関係性などを検討した。

◆日本倫理思想輪読会：本プロジェクトの一環として輪読会を不定期に9回開催した。会合を開き、日本倫理思想史を考える上で基本的な文献を精読し議論を重ねた。本年度は、ルース・ベネ

ディクト『菊と刀』をテキストにしたほか、同書に対する当時の評価などもいくつか確認した。中心となるメンバーは学内研究員の荒木夏乃氏、学内協力員の清水真裕氏、大持ほのか氏、阿部雅氏である。

◆古事記（伝）研究会：本プロジェクトの一環として、日本思想の原点となる倫理思想を探求すべく『古事記』本文を精読する研究会を6回開催した。日本思想の経験豊富な専門家、若手研究者、大学院生、それ以外にも西洋哲学、宗教学の研究者といった幅広い層の参加者が自由にテキストに向き合い議論した。西郷信綱、神野志隆光らの現代の注釈、本居宣長『古事記伝』、さらにはそれ以前の代表的な日本書紀注釈や古事記本文の諸本の異同も参照しつつ、多様な読解の可能性を探求した。主なメンバーは中野裕考氏、大久保紀子氏、徳重久美氏である。

## 8. 科学研究施設と地域社会—緯度観測所と近代岩手の文化

### The Impact of A Science Institute on Its Local Community: The International Latitude Observatory, Mizusawa and Its Influence on the Modern Cultures in Iwate

①主旨：科学研究施設が地域の文化に与えた影響について、文字資料・非文字資料の調査を通して学際的に考察する。具体的には、国際緯度観測事業を遂行する目的で1899年に岩手に設置された緯度観測所が、単なる科学研究施設の枠組みを超えて近代岩手の文化的諸相（文学、芸能、芸術、教育、スポーツ等）に与えた影響を、科学史・博物館学・史料学・民俗学の視点から調査考察するとともに、緯度観測所関係アーカイヴの保存・活用について検討する。

This project aims to examine the influence of the International Latitude Observatory, Mizusawa (established in 1899) on the cultures of its local

community in Modern Iwate. Both written and non-written historical materials of the observatory will be closely studied from the aspects of Science History, Museology, Archival Studies, and Folkloristics. The project also discusses how to keep the observatory's archives preserved and accessible.

②プロジェクト担当者：新井由紀夫（本学教員）

③学内研究員：宮内貴久（本学教員）

④学内協力員：

森暁子（本学特別研究員）、大持ほのか（本学院生）

⑤研究協力員：

馬場幸栄（国立民族学博物館プロジェクト研究員）

⑥活動経過：

①口頭発表

1. 馬場幸栄「天文学者・川崎俊一（明治29年—昭和18年）関連写真の発見：国立天文台水沢VLBI観測所収蔵ガラス乾板調査より」、全日本博物館学会第43回研究大会、於：滋賀県立琵琶湖博物館、2017年7月2日。

2. 馬場幸栄「大正末期の建築指図に描かれた緯度観測所の建造物」日本天文学会2017年秋季年会、於：北海道大学、2017年9月12日。

3. 馬場幸栄「知られざる科学史のヒロイン：国際緯度観測事業を支えた岩手の少女たち」、第12回国際日本学コンソーシアム「壁をこえる」、於：お茶の水女子大学、2017年12月12日。

②ポスター発表

1. 馬場幸栄・石川利昭「小規模図書館でもできる 地域の古い建物を登録有形文化財にする方法」、第19回図書館総合展ポスターセッション、於：パシフィコ横浜、2017年11月7日—9日。

2. 馬場幸栄「第3代所長・池田徹郎が描いた緯度観測所絵巻」、日本天文学会2018年春季年会、於：千葉大学、2018年3月14日—17日。

③その他

1. 「いわて銀河フェスタ 木村栄記念館特別展示」への緯度観測所写真提供，於：木村栄記念館，2017年8月19日。

2. 写真展「緯度観測所を支えた岩手の女性たち ガラス乾板写真に記録された近代日本科学技術史」，於：奥州宇宙遊学館，2018年3月3日・4日。

## 9. 寄進の比較社会史

### Comparative social history of donation

- ①主旨：寄進は、時代や地域を問わず、現在に至るまで様々な形態をとりながら行われてきた。しかしそれぞれの時代や地域で「寄進」と称されている行為を比較したとき、共通点や相違点が数多く見出される。本プロジェクトでは、そのような共通点や相違点を比較・検討することにより、寄進という行為が民族や地域の違いを越えて広く行われてきた理由を、社会史的に考察する。

The donation has been carried out in various forms from now to the present regardless of age or region. However, when comparing behaviors called “donation” in each era or region, many common points and differences are found. In this project, by comparing and examining such common points and differences, We will consider the reason why the act of donation has been widely carried out beyond ethnic and regional differences from social history.

- ②プロジェクト担当者：大藪海（本学教員）
- ③学内研究員：  
三浦徹（本学教員）、新井由紀夫（本学教員）、  
神田由築（本学教員）
- ④学内協力員：  
池田美千子（本学AA、放送大学・東洋大学非常勤講師）
- ⑤研究協力員：内田滯子（放送大学非常勤講師）
- ⑥活動経過：  
プロジェクトメンバーそれぞれが各自の専門

領域における「寄進」について研究を進め、その成果をもとに、「比較社会史」の授業最終回を使用してミニシンポジウムを開催した。ミニシンポジウムでは、各自の興味・関心に基づき様々な論点が出されて活発な議論がなされたほか、学生との質疑応答も行われた。

また、平成29年（2017）11月3日に行われた科学研究費補助金基盤研究B「室町～江戸初期における書物移動と大名文庫の蔵書形成に関する総合的研究」（研究代表者前田雅之）研究会において、内田滯子が「白河二条十一面堂周辺」と題した報告を行った。この報告では、長谷寺観音の靈験譚集である『長谷寺験記』成立の背景に、焼亡した長谷寺の復興を持明院統皇統からの寄進により成し遂げたいという思惑が存在した可能性を指摘した。

## 10. 上方落語を用いた近現代方言の総合的研究

- ①主旨：明治初期～現代の上方落語を、方言の観点から研究し、近代から現代にかけての京阪方言にどのような変遷があったのかを明らかにする。特に、落語同人誌『上方はなし』（昭11 - 15年）に収められた五代目笑福亭松鶴の速記落語をコーパス化する作業を通して、語彙や文法にみられた変化を考察する。
- ②プロジェクト担当者：竹村明日香
- ③学内協力員：  
宇野和（本学院生）、池田來未（本学院生）
- ④客員研究員：岡島昭浩（大阪大学）  
桂紋四郎（落語家）
- ⑤研究協力員：  
久田行雄（大阪大学院生）、以倉理恵（大阪府立大学非常勤）
- ⑥活動経過：  
本年度は、速記落語『上方はなし』のコーパス整備を中心とし、各方面の研究者と打ち合わせを行い、どのような形でコーパスを提供する

のがふさわしいかを検討した。

作業としては、まずブレンテキストデータとして入力していた『上方はなし』の本文を再チェックし、誤字・脱字の修正を行った。そしてそれらを全文検索システムhimawariにインストールして文字列検索ができるようにした。また、web茶まめで形態素分析をしたデータをChaKi.NETに取り込み、手作業で誤分析の箇所を修正した。

2017年11月27日（月）には竹村明日香（プロジェクト担当者）と桂紋四郎（客員研究員）とが打ち合わせを行い、芸能関係者にも使いやすいコーパスにするため、データに土地や話者情報も付加することを取り決めた。

2017年12月16日には、国立国語研究所の通時コーパスプロジェクトの合同研究発表会にて、コーパス化の現状と課題、本コーパスを用いた文法・語彙研究の活用例などを報告した。発表内容は以下の通り。

◆竹村明日香「上方はなしコーパス作成の現状と活用例」（国立国語研究所共同研究プロジェクト「通時コーパス」活用班 近世・近代グループ／文体・資料性グループ合同研究発表会、2017年12月16日、明治大学）

発表では、積極的な意見交換が行われ、市村太郎氏（常葉大学）や田中牧郎氏（明治大学）から有益なアドバイスを受けた。

以上に加え、宇野和・池田來未（学内協力員）の協力により、大阪方言の語彙を本文から抽出し、語彙索引の基礎となるデータの構築を行った。

来年度は、形態論情報付きの『上方はなし』コーパス（試作版）を完成させ、日本語学や演劇学の研究者に頒布するとともに、コーパス用いた研究を行って論文を発表する予定である。

## 11. 明治日本の政治と文化—多分野交流から問う 明治150年

①主旨：平成30年（2018年）は、明治維新（1868年）からちょうど150年を迎える節目の年である。これまで明治維新、明治日本に関する研究は各研究分野において進められてきたが、研究分野間の交渉は稀薄であり、研究の蓄積にしたがって明治維新、明治日本の総合的な理解はむしろ困難になってきたように思われる。そこで本研究プロジェクトでは、明治維新以降の政治と文化の変容について多面的に検討し、各分野の研究成果の共有と相互関係の構築を図る。特に、政治史と文化史を架橋する視点（時間・身体・技術・教育など）から、明治維新や明治日本に対する捉え方・歴史観を見直し、新たな研究の視点や論点を模索することとする。

②プロジェクト担当者：

難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）

③学内研究員：

宮尾正樹（本学教員）、宮内貴久（本学教員）、石井久美子（本学教員）

④学内協力員：

加藤恭子（本学院生）、加藤絵里子（本学院生）

⑤客員研究員：鈴木淳（東京大学）

⑥活動経過

1) 研究報告

・旧制高等学校記念館主催の第22回夏期教育セミナーにおいて明治期の男女の学校制服に関する研究発表を行ない、教育史や教育社会学の研究者と意見交換した。

報告題目：難波知子「制服をめぐる女学生文化—かたち・ルール・着こなし・製作の男女比較—」

日時場所：2017年8月20日、旧制高等学校記念館

・教育史学会第61回大会において明治期の教育制度とその運用に関する研究発表を行い、教育史研究者とディスカッションした。

報告題目：湯川文彦「特例からみた明治初期教育制度」

日時場所：2017年10月7日、岡山大学

## 2) 研究調査

・明治期の女性労働着の調査のため、2017年8月23日、11月9～10日にかけて、富岡製糸場にて資料調査を行なった。労働着に関する資料は、戦後のものしか発見できなかったが、昭和26「作業服貸与台帳」から当時の労働着の取扱われ方や具体的なサイズ、数量などが明らかとなった。研究成果については、3月に行われる富岡製糸場女性労働環境等委員会において報告予定。同委員会では、富岡製糸場における機械技術、建築、医療、教育などさまざまな観点から研究報告が行なわれ、分野を異にする研究者との交流が期待できる。

## 3) 研究会の実施

・平成30年度の国際日本学シンポジウム「明治日本の政治と文化―多分野交流から問う明治150年（仮）」の開催に向けて研究会（2017年12月12日）を実施し、コペンハーゲン大学のマーガレット・メール氏と明治の西洋音楽の受容と実践についてディスカッションした。

# グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門年報 研究論文投稿規定

本年報はお茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門の年報である。

## 1. 掲載資格

- ・研究論文：投稿資格を有するのは本部門員、及び研究プロジェクトの学内研究員、客員研究員、研究協力員とする。
- ・公開講演会、コンソーシアムなど、部門が行う各種催しにて講演、発表を行った場合、原則として論文（または要旨）を掲載する。都合により講演者、発表者自身が執筆できない場合には、各会責任者（セッション、部会などがある場合には、その責任者、以下「各会責任者」と記す）が抄録等を掲載する。

## 2. 締切

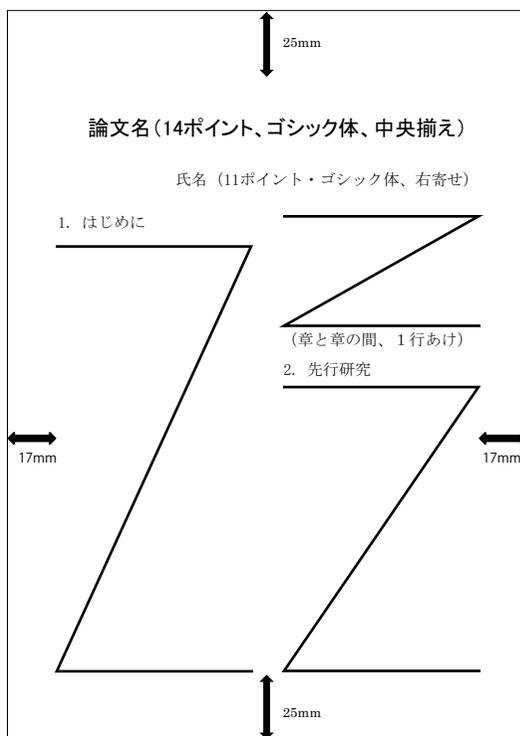
- ・研究論文は12月末日、その他講演会、シンポジウム等での講演、発表は開催後2か月以内とする。但し12月に開催されるものについては別途指定する。1月以降に開催されるものについては原則として次年度の研究年報に掲載することとする。

## 3. 書式

- ・B5判横書き word 原稿、22字×38行
- ・余白：上下25mm、左右17mm 本文2段組み
- ・フォントは下記のとおりとし、数字は原則として半角の算用数字を使用する。

	「明朝体」	「ゴシック体」
和文	MS明朝	MSゴシック
英文	Times New Roman	Arial

- ・論文名：14ポイント「ゴシック体」左右中央  
副題は9ポイント
- ・執筆者名：11ポイント「ゴシック体」右寄せ
- ・本文（図表・注・参考文献・資料）
- ・本文：9ポイント「明朝体」
- ・注：8ポイント「明朝体」
- ・参考文献：8ポイント「明朝体」
- ・用紙サイズ：B5判（182mm×257mm）
- ・章と章の間のみ、1行あける。
- ・図表内の文字もできるだけ、本文に準じる。本文との間を1行以上あけること。



## 4. 提出先

- ・研究論文：年度ごとの研究年報編集委員に提出する。

- ・公開講演会・その他：各会責任者に提出する。
5. 原稿提出方法
- ・word原稿を添付ファイルで送付する。
  - ・メールには日英両語で題目と氏名、連絡先（郵便番号、住所、電話番号）を明記する。
6. 使用言語
- ・使用言語は日本語とする。但し何らかの理由により外国語で執筆することが認められた場合には外国語を用いることができる。
7. 校正
- ・内容、形式面の校正は原則として著者校とし、著者が行う。原則として著者校は1校のみとする。
  - ・事務局は原則として校正を行わない。
  - ・校正は原則、電子媒体を通して行う。
  - ・論文校正と並行し、目次の校正を行う。両者で論文題目や氏名の表記に不一致がないことを確認する。
  - ・提出先、問い合わせ先は、シンポジウムなど、各種催しでは各会責任者、研究論文は編集委員とする。
  - ・各会責任者は校正原稿がそろった時点で問題がないか最終確認を行い、編集委員に提出する。
  - ・万一2校以降が必要な場合には各会責任者が行う。
8. 原稿の査読
- ・原則として査読は行わないが、以下に該当する原稿は不掲載、または修正を求めることがある。
    - (a) 内容が本部門の活動趣旨になじまないと判断されるもの。
    - (b) 研究論文の場合、内容的に研究論文とは見なせないもの。
- (c) 個人攻撃・差別的表現など、公的なメディアに掲載するには不適切と考えられる記述を含むもの。
  - (d) 極めて煩雑な組版上の操作が必要であるもの。
9. その他
- ・投稿論文執筆者には、雑誌刊行時に2冊を贈呈する。抜刷は作製しない。
  - ・著作権などの処理は原則として執筆者が行う。
  - ・年報に掲載されたものは原則としてWeb (Tea Pot) 上で公開される。Webでの公開を希望でない場合は事前に各会責任者、または編集委員に連絡する。
  - ・同様の内容が報告書等に掲載される場合には、本研究年報のほうをオリジナル原稿とする。

## 第20回国際日本学シンポジウムのお知らせ

### 【日程】

平成30年7月7日（土）～8日（日）

【開催場所】 お茶の水女子大学（東京都文京区）

### 【全体テーマ】

変革と継承の明治文化

—地域／都市からみた文化形成—

平成30（2018）年は、明治維新（1868年）からちょうど150年を迎える、節目の年である。各地で“明治150年”に関連するイベントや企画が行われているが、本学の比較日本学教育研究部門においても、明治150年を振り返り、これまで各研究分野で進められてきた明治日本の文化形成に関する研究成果、および新視点や論点を共有するシンポジウムを企画した。

テーマは「変革と継承の明治文化—地域／都市からみた文化形成—」である。明治期、近代国家形成過程にあった日本では、一方では西洋から制度、思想、知識、技術などを取り入れ、他方では日本在来のそれを活用、再評価することによって近代的な社会、文化を形成した。そのため、明治文化においては「西洋」を受容する際に多様な解釈や実践が生じ、また「西洋らしさ」に対する「日本らしさ」の追求といった問題も生じた。したがって、人や場所、対象とする文物によって、さまざまな文化形成の局面が表出した点に明治文化の特徴があると考えられる。そこで本シンポジウムでは多様な側面をもつ明治文化について、各研究者の研究対象を通して、地域／都市の双方の視点から、また変革／継承の両面から、文化形成のプロセスに生じた葛藤や創造の様相を比較検討することによって、理解を深めていきたい。

### 【企画担当】

難波知子（本学教員）、湯川文彦（本学教員）

【1日目】7月7日（土）午後のみ

テーマ「地域からみた文化形成」

#### <登壇予定>

基調講演　マーガレット・メール氏  
（コペンハーゲン大学）

パネリスト　北原かな子氏（青森中央学院大学）  
寺尾美保氏  
（東京大学大学院博士後期課程）

【2日目】7月8日（日）

テーマ「都市からみた文化形成」

#### <登壇予定>

基調講演　鈴木淳氏（東京大学）  
パネリスト　平山昇氏（九州産業大学）  
満園勇氏（北海道大学）  
湯川文彦（お茶の水女子大学）

最新の情報は、グローバルリーダーシップ研究所  
比較日本学教育研究部門のホームページ（<http://www.cf.ocha.ac.jp/ccjs/>）にてご確認ください。

## バックナンバーのご案内

『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号の在庫は以下の通りです。

ご注文、お問い合わせは下記までご連絡ください。

メールアドレス ccjs@cc.ocha.ac.jp (グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門)

号	残部	価格 (送料別途)
第1号	約25部	1,000円
第2号	約30部	1,000円
第3号	約30部	1,000円
第4号	約5部	1,000円
第5号	約5部	1,000円
第6号	約60部	1,000円
第7号	約50部	1,000円
第8号	約5部	1,000円
第9号	約25部	1,000円
第10号	約15部	1,000円
第11号	約50部	1,000円
第12号	約40部	1,000円
第13号	約10部	1,000円

なお、『比較日本学研究センター研究年報』第1～4号、及び『比較日本学教育研究センター研究年報』第5～13号は、お茶の水女子大学教育・研究成果コレクション (<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>) にて公開されています。こちらをご覧くださいましたら幸いです。

#### 編集委員より

国際日本学シンポジウムおよび国際日本学コンソーシアムの掲載論文の題目は、一部、発表時と異なるものがあります。著者の方から提出された原稿の通りに掲載しました。また、一部の執筆者は要旨のみの掲載となっております。表記などについては編集の都合上、編集委員の方で統一させていただきました。

#### お知らせ

大学の組織改編により、比較日本学教育研究センターは、グローバルリーダーシップ研究所の一部門となり、グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門へ組織名称を改めました。それに伴い、本誌も名称を変更しました。

また、創刊号から第13号までの奥付に掲載された、お茶の水女子大学の住所が間違っておりました。誠に申し訳ございません。ここに訂正いたします。

(誤) 東京都文京区大塚2-2-1

(正) 東京都文京区大塚2-1-1

『お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所比較日本学教育研究部門研究年報』

2017年度編集委員 田中琢三 松岡智之 高橋喜子 吉井祥